

令和5年度

# 福祉作文

WELFARE COMPOSITION



社会福祉法人  
赤穂市社会福祉協議会



# 「地域共生社会」の実現にむけて



社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

理事長 児嶋佳文

少子高齢化と人口減少が急速に進む中、地域社会や家族形態の変容、個人の価値観やライフスタイルの多様化などにより、地域における「共助」が弱まり、複合的な課題を抱えた世帯や、制度の狭間になって既存のサービスを受けられない世帯が増加するなど、地域の生活・福祉課題は複雑化・多様化しています。

社会福祉協議会では、地区別懇談会等を通じて市民の皆さまの声を直接お伺いしながら、人とひと、人と地域のつながりを大切にし、共感と思いやりをもって、支えあい助けあう地域づくりの支援に取り組み、誰もが住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らせる福祉のまちづくりに努めてまいります。

中でも、次世代を担う子どもたちの福祉教育の推進は特に重要であり、社会福祉協議会では、従来から赤穂市や学校園はもとよりボランティアの皆さんと連携を図りながら、心のふれあいと思いやりが体感できる福祉教育の推進を図っており、今後さらにそれらの支援を充実させてまいりますので、これまで以上のご協力を賜りますようお願いいたします。

本年度も福祉の問題は「地域で暮らす方の身近な課題である」ということを認識していただくため、「福祉作文」を募集しましたところ多くの作品の応募があり、いずれも心に響く作品でしたが、その中から優秀作品を選び、「赤い羽根共同募金」の配分金をもとに文集を作成いたしました。

この文集が大勢の皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、助けあい、大切にしようとする気持ちが社会に広がり、本市の地域福祉が向上することに少しでも役立てれば光栄です。文集の発行にあたりまして、作品を応募していただきました皆さま、ご指導、ご協力をいただきました学校関係者の皆さまに深くお礼申し上げます。

令和五年十二月

\*福祉作文\*

小学生の部

大賞	「普通」ってなんだろう	赤穂小学校六年	大黒心春	1
特選	たのしかった0円ストアのボランティア	塩屋小学校二年	林慶明	3
入選	自分に出来るボランティア	城西小学校五年	谷山琳香	5
	ぼくは認知しようサポーター	高雄小学校五年	森辻葵	7
佳作	車いすに乗ってみて	赤穂小学校四年	海江田紗和	9
	私の姉は、	城西小学校六年	西垣みのり	11
	誰かのために動くこと	塩屋小学校六年	柴原幸	12
	役に立てるよろこび	赤穂西小学校五年	山下芽衣	14
	「だれか」じゃなくて「だれもが」	尾崎小学校六年	西口陽菜	15
	友だちになりたい	御崎小学校二年	中間千智	17

中学生の部

わたしの考え

「みんなが」住みやすい社会

九十四才のひいおばあちゃん

みんなおいでよーいきいきサロン

坂越小学校四年

高雄小学校五年

有年小学校五年

原小学校三年

上山鈴捺

大地慶

田中結音

三輪みのり

……

……

……

……

18

19

21

22

大賞

幸せのランドセル

赤穂西中学校三年

岸田優音

……

25

特選

みんなが平等で安心できる社会へ

赤穂東中学校二年

山本真奈美

……

27

入選

愛でいっぱい

赤穂西中学校三年

山之美咲

……

29

私の弟

赤穂東中学校一年

後藤結愛

……

31

佳作

今、できること

赤穂中学校三年

林那菜子

……

33

僕もおばあちゃんのように

赤穂西中学校二年

豊岡悠燈

……

34

障がい者と共に生活する社会を目指して

赤穂東中学校二年

畑本茉莉香

……

36

こしよくについて考えた〜一人じゃないよ

坂越中学校一年

宮本暖加

……

38

おじいちゃんとの別れで考えたこと

有年中学校一年

小河拓夢

……

40

高校生以上の部

大賞	僕の母親	赤穂高等学校一年	木島優成	……	42
特選	私の身近な福祉	赤穂高等学校一年	坪本光叶	……	43
入選	私ができること	赤穂高等学校一年	大高莉奏	……	46
	つながる努力	一般	齋藤智栄	……	47
佳作	みんなが暮らしやすい工夫	赤穂高等学校二年	清水菜月	……	50

※「障害」や「障害者」などの「害」の字はひらがな表記にしています。  
ただし、法律名については漢字表記にしています。

## 小学生の部 大賞

### 「普通」ってなんだろう

赤穂小学校六年 大黒心春

この夏休みに、私の弟は入院しました。自分の細胞を別のところに移植する手術をするためです。弟はICUという、命が危ない人が集中的に治療するところに入ったので、とても心配しました。

私の弟は、口唇顎口蓋裂症という病気を持って生まれてきました。この病気は、上唇や上あごがくっつかずに、鼻と口がつながって生まれてくる病気で、弟の場合は、耳の形も左右で少し違っていたり、一歳を過ぎるまではほとんど耳が聞こえていなかったりもします。今も少し耳が聞こえていないかっべるのは好きだけれど、か行、た行、さ行など、いくつか発音しにくい音もあります。特に、しゃべりたいことがたくさんあって早口になっている時は、

ますます相手には聞き取りにくいです。でも、私たち家族はたいてい、弟が何を話しているのか聞き取れます。そして、弟はいつもニコニコと明るく、周りを笑顔にしてくれます。

弟が生まれてきたのは、私が幼稚園に通っている時です。私も幼かったので、あまりはつきりと覚えていませんが、初めて弟に会った時「普通」の赤ちゃんとは違うと感じました。それは、たぶん、口と鼻の形が「普通」と違ったからだと思います。弟は昔からうどんが大好きで、赤ちゃんの頃、鼻が口の中とつながっていた弟は、大好きなうどんを食べると、鼻からうどんが出てきていました。でも全く気にする素振りもなく、うれしそうにうどんを食べていたのを覚えています。

そんな弟は元気に五歳になり、この夏、四回目の手術をしました。今回の入院は、途中で父と母が交代することになりました。それを聞いた弟が、「え、おとーさん入院初めてやったら何も分からへんやろ、大丈夫？」と言って、自分のことではなく、今まで一度も入院をしたことのない父のことを心配し

ていました。父が「お父さんわからんから教えてな。」  
と言うと、続いて母も「いろいろ教えたってな。」と。  
私は思わず笑ってしまいました。両親や上の弟たち  
も笑っていました。でも、いつも明るく楽しい雰  
囲気にしてくれる弟も、やはり、入院が近くなると「入  
院いやだな」と言っていました。しかし、入院当日  
に、荷物の確認をしている母に向かって、「おかー  
さん早く！新幹線行っちゃう。」と言い、大好きな  
新幹線に乗ることを楽しみに、笑顔で家を出ていく  
のを見て少しほっとしました。手術が無事に終わっ  
て、とても安心したけれど、いろいろなチューブに  
つながれ包帯をまいてある弟を見た時、とてもしん  
どそうで、胸がいっぱいになりました。元気になっ  
て退院した時は、心のきりが晴れるようにうれしく  
なり、弟を抱きしめました。

私は弟を通して、「普通」について考えることが  
あります。弟にとっては、鼻からうどんがでてきて  
いたことが普通。今も少し耳が聞こえにくいけれど、  
それが普通。発音が難しい音があることが普通。唇  
が割れて生まれてきたけどそれが普通。私は、弟が

生まれてきた時、「普通」の赤ちゃんじゃないと思っ  
たけれど、弟にとっては、これが「普通」なんだと  
気づかされます。

弟と私も「普通」は違うように、みんな「普通」  
はそれぞれ違います。だから、自分の「普通」を相  
手に押し付けたり、相手の「普通」を批判したりせ  
ず、お互いの「普通」を認め合うことが大切だと思  
います。

弟は、遠いところの病院に通ったり、言葉の勉強  
をしに行ったりと一生けん命努力しているので応援  
してあげてください。弟は、私や、家族を笑顔にし  
てくれます。ずっとずっと元気いっぱいまでいま  
までいてね。



## たのしかった0円ストアのボランティア

塩屋小学校二年 林 慶 明

夏休みに、にしはりまとくべつしえん学校で0円ストアの子どもボランティアをしてきました。0円ストアは、いらなくなった本やふく、たべものをむりようでゆずりあうイベントです。

ぼくのおかあさんは、にしはりまとくべつしえん学校ではたらいています。春のころ、おかあさんが、「夏に0円ストアがあるけど、よしくんもくる？」と聞きました。小さいころ、おきやくさんで行ったことがあったのしかだったので、ぼくは「行きたい。」とこたえました。

七月十五日にボランティアのうちあわせ会に行きました。知らないお姉さんやおにいさんがきていて、

すぐくドキドキしました。四年生の男の子が、「となりにくる。いっしょにやろう。」

と言ってくれました。ぼくと男の子は、いっしょに絵本がかりをすることにしました。ブロックやかみをつかって、つくえのはいちや入り口、出口のぼしよを考えました。大きいかみに、「絵本こうかん会にきてください」と書いてじゅんびしました。

八月四日は、いよいよ本ばんです。じゅんびでは、四年生の男の子と五年生の女の子とおきやくさんのたいおうについて話しあいました。友だちはべつのごとがあったので、絵本は一人でならべました。本をならべるときにくふうしたことは、だいめいが見えるようにしたり、ぼくのおすすめの本を上にした、本のしゆるいごとにまとめておいたりすることです。よてい時間より早くおきやくさんが入ってきたので、びっくりしました。おきやくさんが入ってきたら、

「いらっしやいませ。」

と言いました。おきやくさんが本をえらんだら、本をかみぶくろやエコバッグに入れてわたしました。

おきやくさんがかえる時には、かならず、元気にか  
かるく、本をもらって来てくれてありがとうというおも  
いで、

「ありがとうございます。」

と言いました。おきやくさんも、

「ありがとう。」

と言ってくれました。多い時には、おきやくさんが  
ならんだりまったりするので、たいへんでした。ほ  
くが、がんばってしごとをしていると、そばにいた  
おとなボランティアさんがほくにむかって、

「ごども店長。」

と言ってくれました。すぐうれしかったし、ほく  
がリーダーだからみんなをひっぱらないと、と思い  
ました。おきやくさんがいない時にはよびこみに行  
き、

「こんな本がありますよ。」

と言ったり、

「お金はいりません。」

と言ったりしました。

とちゅうで、車いすにのった小さい男の子がきま

した。その子のおかあさんに、

「どんな本がいいですか。」

と聞きました。そしたら、

「読みやすく、手にもてるように小さくて、ペー  
ジ数がすくなくて、大きいイラストの本がいいな。」  
と言われました。ほくは、三さつえらんでもって行っ  
てあげました。

「おにぎりの本がいいな。」

とその子のおかあさんが言ったので、本をかみぶく  
ろにいで、

「ありがとうございます。」

と言ってわたしました。男の子は手を元気にうごか  
していました。ほくは、どうして手をうごかしてい  
るかかわからなかったけど、あとからほくのおかあさ  
んが、

「本をえらんでもらってうれしかったのかな。」

と言ってくれました。ほくは店長としてせいちよう  
できたなと思いました。

かたづけの時間になりました。ほくは長いつくえ  
をエレベーターをつかって会ぎ室までいどうさせま

## 小学生の部 入選

### 自分出来るボランティア

城西小学校五年 谷 山 琳 香

した。ぼくは、つくえのあしにロックがかかっているのに気づかずはこんでしまいました。おもいなと思っていたら、そばにいたおとなボランティアさんが気づいてロックをはずしてくれました。つぎから自分で気づいてなおしたいなと思いました。みんなときよりよくして0円ストアをもらいあげることができました。お店のしごとのしかたがわかって、たのしかったです。いろいろなおきやくさんによるこんでもらって、とてもうれしかったです。



今年の春、三十一センチ以上の長いかみの毛を切りました。

ある日、お母さんが、

「今年は、自然学校があるし、お手入れも大変になってきたから、そろそろかみの毛を切ったら？」

と言う何気ない会話から、

「毛先だけ数センチ切るだけだったらいいかも。」

と私が言うと、

「思い切って、バッサリ切って、ヘアドネーションをしてみたら？病気でかみの毛がぬけてこまっている人が世の中において、医りよう用ウィッグを作るのに、三十人分のかみの毛を集めて、やっと一つのウィッグが出来るみたいだから、琳香のかみの毛、

こまっっている人のためにどうかかな？」  
と言われました。

せっかくのばした長いかみの毛を切るのは、とてもいいこうがあつて、もったいないという気持ちと少し勇気がいりました。

私のお父さんは、がんでなくなりました。お母さんの話によると、がんの治りようをしていたとき、こうがんざいでかみの毛が日に日にぬけていたと聞き、その時の写真を見て思い出しました。私は、まだ三才だったので、何となくしか記おくがありません。

そのときの事をお母さんに聞いたら、病氣とたたかって、大変なのにさらにお父さんのかみの毛がぬけていくのは、見ていてとても悲しかったと話していました。

だから、医りようウイッグなどでだれかの役に立つように、ヘアドネーションをすすめたお母さんの気持ちがとてもよく、分かりました。

私は今まで、かみの毛を短く切ったことがなかったけれど、切ってみると、気分もかみの毛もスッキリ

りですがすがしい気持ちになりました。

新聞で、大人や子ども男の人でもヘアドネーションをしている記事を読みました。

その記事に、男の人がかみの毛をのばすことで、学校でからかわれたり、女の子にまちがわれたり、しよく場で身なりがだらしないとへん見の目で見られたりして、大変だったけど、自分の信念をつらぬき、だれかの役に立てることをほこりに思っていると書いていました。

私は、その人のことをはずかしい思いやいやな思いをしても、やりとげることにはすごいなと思いました。

自分にできるボランティアに参加して、こまっっている人の役に立って、見えない相手に感しゃしてもらえることは、とても心が温かくなりました。

今回、ヘアドネーションが出来るかみの毛の長さまでのばすのに、三年以上かかるけど、がんばつてのばして、寄付することができてよかったと思いました。

このことから、ちょっとしたきっかけで、こまっ

ている人が減り、その人に感しゃしてもらえるのは、いいことだなと思いました。

## ぼくは認知しようサポーター

高雄小学校五年 森 辻 葵

ぼくのひいおばあちゃんは92才になりました。家に行くときすごい喜んでくれていつも果物やおかしをくれます。何もない時は500円玉をくれて「これで好きな物買えるか?」と、言ってくれます。

こしがまがっているし足がわるいけどひいおじいちゃんがいなくなってからずっと1人暮らしをしているそうです。

2年前に家の中でころんで骨折してしまい、入院しました。おみまいに行くときとても喜んでくれて今来たばかりなのに「次はいつ来るんや?」と言います。

少し前に認知しようになっちゃったけどぼくの

顔を見るとやさしい顔をして笑ってくれます。

3年生のときにお母さんに認知しようサポーター養成講座につれていかれました。年れいせい限がないらしくて、「最後までできいてくれてありがとう」とオレンジのリングをもらいました。認知しようの人に対する接し方や、やってはいけない事など、いろんな事を教えてもらいましたが、ひいおばあちゃんが認知しようになるとは思っていませんでした。

実は、「福し」って、聞いた事はあるけど意味はあまり分かりませんでした。

5年生になって、学校に福しの人達が来た時に「ふつうのくらしのしあわせ」だという事を教えてもらいました。フライングディスク、ボッチャと言うゲームも初めて知りました。

フライングディスクはスタートライン手前から1枚のディスクを投げて出発し、ディスクの落ちた地点まで残りのディスクを持って走ります。落ちたディスクの中心から1.5m以内のライエリアにとう達したら、持っているディスクを投げ、投げおえてから落ちているディスクを拾い、進みます。ボッチャ

は、先このチームが自分のカラーボールを投げます。後このチームが自分のカラーボールを投げます。ジャックボールから遠いチームが、相手よりも近づくか、またはボールが無くなるまで投げます。両チームが6球全て投げ終わったらしんぱんが得点をはんだします。むずかしかったけど楽しかったです。

学校のじゆ業では、目の見えない人や足の不自由な人の事を知りました。

ぼくに出来る事はあまりないかもしれないけど、認知しよや障がいのある人に会った時にどうすれば良いか知る事が一歩目だと思いました。

ひいおばあちゃんは今、老健というしせつにいます。老健は介護を受けながらリハビリをして家に帰れるようにするしせつだそうです。

ぼくが会いに行くのと笑ってくれるからいっばい会いに行っておばあちゃんを笑顔にしたいです。家の近くのおじいちゃんやおばあちゃんにも自分からあいさつして、仲良くなって、困っている時に何か出来たらいいな。「ふつうのくらしのしあわせ」って

聞いた時に、ぼくは笑顔が思いうかんだから、みんなが笑顔でいられますように。

年れいや障がい関係なく、みんながふつうにくらせて、しあわせでいられたらうれしいです。



## 小学生の部 佳作

### 車いすに乗ってみて

赤穂小学校四年 海江田 紗 和

春休みに家族で東京旅行に行きました。私は足の調子が良くないので、長距離を歩くことができません。なので、車いすに乗って旅行に行きました。

車いすに乗って移動をすることで、大変だった事、困った事がたくさんありましたが、人の優しさを感じたりすることもたくさんありました。

一番困ったことは、エレベーターを探すことです。エレベーターがないと移動が難しいですが、駅でも建物でもエレベーターが一か所しかないところが多くて、しかも端の方にあることが多いので、移動に時間がかかりました。はじめての場所だとエレベーターがどこにあるのか分からないので、標識や地図を探すのに苦労しました。

やっとエレベーターにたどり着いても、こしゅう中のこともあって、戻って別の道を探さないとけなかつたこともありました。

東京では電車に乗ることがたくさんありました。電車に乗る、降りるということも、自分一人ではできません。お母さんに押しってもらって乗り降りをしました。その時も広いスペースがないと入れませんでした。たくさん人が乗っている電車は乗れそうになかったのですが、お母さんが、

「次の電車にする？」

と、言いましたが、電車の中の人たちがスペースを空けてくれて、乗ることができました。

ホームに人が多くて、ホームの端の方を通っていると、電車が近すぎてとても怖かったです。

車いすに乗って旅行に行って、一番思ったのは、エレベーターが増えたらいいなということです。駅にもまだエレベーターがない駅があります。エレベーターだけでなくスロープがあればもっといいです。そして、エレベーターの標識がもっといろんな所にあつたらいいなと思いました。

そして、たくさんの人に助けってもらって、たくさんの優しさも感じました。

飛行機に乗るときは車いすを手荷物預かりに預けて、代わりに木製の車いすを貸してもらいました。自分の車いすよりずっと重くて、自分で押せないのでお母さんが押してくれていましたが、お母さんも大きい荷物を持っていたので、空港の人が優しく押してくれました。

飛行機にとう乗するときには、私と同じ車いすの人や、障がいのある人、ベビーカーを押しているお母さんを一番最初に乗せてくれました。私たちが無事に乗れてから一般のお客さんが乗ってきました。逆に降りるときは、一般のお客さんが降りた後に降りました。それもキャビンアテンダントの人が案内してくれて、スムーズに移動できました。そして、キャビンアテンダントの人や、空港の係の人がみんな、とてもいい笑顔で安心しました。

ドイツニールランドにも行きました。

キャラクターのみんなは、車いすの私に合わせてしゃがんであいさつをしてくれたり、写真を撮って

くれたりしました。

アトラクションも、キャストの人がすぐに車いすに気が付いて、車いすや障がい者用の通路を案内してくれました。不便はあるけど、キャストの人たちのおかげでとても楽しく過ごせました。

今回の旅行で車いすの人を見つけたら、エレベーターの場所を教えてあげる、それにエレベーターの扉を開けといてあげることも大事だなと思いました。

落とした物を自分で拾うこともできなかつたりします。道に自転車が広がって停めてあると通ることができないこともあります。

たくさんの人に優しくしてもらった分、私も気付いたことを恥ずかしながら声をかけていきたいと思えます。そして、なにより笑顔を大事にしたいと思えます。



# 私の姉は、

城西小学校六年 西 垣 み の り

私の姉は、大きな音や激しい光が苦手である。映画館やコンサートに行った後は、ぐったりと疲れている事が多い。少しでも疲れが軽くなるように色々工夫している。

例えば、コンサートに行った時はデジタル耳栓を使ったり、だてめがねを使ったりしている。普段の生活でも、ノイズキャンセリングヘッドホンを使用している。

音の大きさをなんて、みんな同じように聞こえているのだと私は思っていた。だから、姉が遊びに行っているのに疲れていたり、行くのを悩んでいるのが不思議だった。私は、全くそんな事がないからだ。

姉がヘッドホンや耳栓を使うようになってから、音や光に過敏な人たちがいて、感覚が人によってちがうことを知った。どんな風に聞こえていたり、音量になっていたりするのか本人じゃないとわからない

い。見た目だけで判断することはできないから、時と場合によってはマナーい反などで悪くみえるのだ。

姉も学校や通学中などに冷たい言葉を聞くことがあると言っていた。ヘッドホンを使用していると目立つからだ。きつと、冷たい言葉を言っている人は、姉が音に過敏だということを知らないのだろう。知っていたら、言わないと思う。母から聞いた話では、たくさんの人たちが、音に過敏でヘッドホンや耳栓、イヤホンを使っているというのだ。この事をもっとたくさんの人が知っていたら、姉はもっと早く、ヘッドホンという相棒を見つけれられ、冷たい言葉を聞くこともなかったのではないかと思った。

人とちがうというだけで、冷たい態度や言葉を言う人がいる。それは間ちがっていると思う。みんなとちがうかもしれないけど、態度やかける言葉は、どんな人にも同じであってほしいと思う。思いやりを持ってほしいと思う。

姉のように大きな音や光が苦手でも、コンサートや映画館にも行きたいし、きれいな花火も観たいと

いう人は、たくさんいると思う。苦手な人とそうじゃない人が一緒に楽しめることが一番大事だ。どちらかに合わせたとしても、どちらかが楽しめなかったり、何かものたりなかつたりと、きつと問題解決にはならないだろう。

でもお互いが、思いやりを持った態度や工夫をすることで、少しずつ歩みより、良い方向に向うことができるのではないかと思う。

姉は、

「黒板の文字が見えにくいから、みっちゃんはめがねをかけるようになったやろ。お姉ちゃんもそれと同じで聞こえる音を調整するためにヘッドホンを使うんやで。」

と、私に話してくれた。すごくわかりやすかった。伝え方を変えるだけで、わかりやすくなるし納得もいく。私も周りの人にこうやって伝えていこうと思った。

ヘッドホンだけでなく、何かを使うだけで調整できたり、快適に生活を送ることができるようになる。もっとたくさんの人たちに伝えたいし、知ってほしい。思いやりをそえて。

## 誰かのために動くこと

塩屋小学校六年 柴原 幸

私は、手話が好きです。手話に興味を持ちはじめたのは、三年生ごろでした。きっかけは、「手話教室」という漫画で、手話やろう者について少しだけ知ったことです。このころから、手話について調べたり、手話を実際に覚えたりして、どんどん手話が好きになりました。

四年生するとき、総合学習で、「自分の町のバリアフリー」について調べ、レポートにまとめようという時間がありました。その時から、手話だけでなく、福祉全体に興味を持ち、点字や盲導犬の本なども読むようになりました。そして、「福祉とはなにか」について、くわしく調べたり、考えたりするようになりました。そこで、先生に教えてもらったのは、福祉とは、「全ての人が、普段の暮らしを、幸せに送れるようにすること」ということでした。この意味を考え、みんなが過ごしやすい町を、私たちが

自身で、作っていききたいです。

まずは、自分達の住んでいる町の現状を知ることが、色々な人への配慮を考えられることにつながると思います。

私は、自分の町の色々な人への配慮について、調べてみたことがあります。そんな中でも、市立の図書館には、障がい者向けの図書、点字図書や録音図書、大活字本などがありました。他にも市役所前には、スペースが広く、電話の位置が低くなった、電話ボックスもありました。さらに福祉会館には、「バリアフリートイレ」や「子供用トイレ」、「おもむつ交換台」、「トイレのベビーチェア」などもありました。この二か所は、使いやすさが、特に考えられていると思います。

それとは逆に、不便だなと思うところもありました。例えば、私の通う小学校には、バリアフリートイレが、体育館にしかありません。母は、「でも、一つはあるやろ?。」

と言っていました。私は、このような設備が、学校の校舎の中にも、他のさまざまな公共施設にも造

られれば、多くの人への配慮になり、誰もが住みやすい町にすることができると思います。障がい者や、おとしよりなど、色々な人とふれあえる機会や場所をつくりたいです。誰か一人の人にとって不便なことにも、気付くことができると思います。

「福祉」とは、「全ての人が、普段の暮らしを、幸せに送れるようにすること」。先生に教えてもらったこの言葉に私は私なりに考えてつけ足したい言葉があります。それは、「誰かが、誰かのために動くこと」。例えば、図書館や、福祉会館には、聴覚障がい者のための、「耳マーク」があり、「筆談しますので、お声かけください。」と書かれていました。そんな呼びかけも、聴覚障がい者にとっては、とても心強く感じられると思います。私も、誰かのために、進んで動けるような人になりたいです。

手話を知って、福祉に興味をもって、「誰かのために動く」大切さを知りました。手話をもっと勉強して、これを誰かのために、役立てたいです。

## 役に立つ人ともない人

赤穂西小学校五年 山下 芽衣

私は、二年前にヘアドネーションをしました。理由は、かみの毛が長くなって、ふ通に切るのもつたくなかったのでヘアドネーションにしよう戦してみようと思ったからです。

かみの毛が長かったからすぐにいたんでしまうので、できるだけケアしていたのに、実際に切る時それがいっしゅんで切られてしまっと思っていた以上に短くなってしまったので心が追いつきませんでした。かみの毛が短くなって楽になったけど、私はロングの方が好きなので、ショートヘアになってすごく悲しかったです。

しかし、かみの毛で困っている人がいるから自分のかみの毛でその困っている人を助けられたと思うと、ヘアドネーションをして、よかったと思います。今、自分のかみの毛がカツラの形になって、だれかの役に立っていると考えると、とてもうれしい気持ち

ちになります。

カツラを使わないといけないじょうきょうの人がいるのは知っていたけど、今まではヘアドネーションをしようとは思いませんでした。あまり福祉に興味がなかったからです。でも、ヘアドネーションをして、だれが今カツラをどう使っているかは分からないけど、人の役に立てる事はとてもうれしくて良い気持ちになることを知ったので、もう一度ヘアドネーションをしたいです。

私は、だれが私のかみのカツラを使ってもうれしいけど、特に使ってほしいと思うのは、病気の人や私と年が近い人です。理由は、お医者さんじゃないので、病気の人の役に立つにはヘアドネーションしかないと思ったからです。もう一つの私と年が近い人に使ってほしい理由は、子供なのにかみの毛の事をなやんでいて、かみの毛がある子を見て、悲しむなら、私のかみの毛をあげて、かみの毛のことでなやんでいる子を一人でも少なくしたいからです。

もし、この先私がカツラを使わないといけなかったらヘアドネーションをしてくれた人にとってもかん

しゃします。かみの毛は、目に見えるので気にする人が多いと思います。

私のかみの毛がすぐのびればすぐカツラにできるけど、かみの毛はすぐにのびないので長い時間をかけてのびたかみをカツラにすると、すごくたっせい感がありました。

ヘアドネーションをしてから福祉に興味があって、ヘアドネーション以外にもできることをふやしたいと思うようになりました。なのでインターネットで調べてみると、たくさん出てきたので、私が知らないだけで福祉の活動がたくさんあることを初めて知りました。ヘアドネーション以外で私がやってみたいと思った福祉の活動は、クリーン・アップ清掃です。学校、通学路、公園、海や川などのゴミ拾いや掃除、除草などを行い、小学生が参加できるものの中で最も募集の多いボランティア活動だそうです。このボランティア活動を知ってから、道に落ちていたゴミが目につくようになりました。ゴミを拾うことは、ボランティア活動に参加しなくてもすぐできるので、小さなことかもしれないけど、自分に

できることから始めていきたいです。

## 「だれか」じゃなくて「だれもが」

尾崎小学校六年 西 口 陽 菜

私は、六年生になって総合の時間にバリアフリーということを学んだ。

まず、バリアフリーについて改めて調べてみると、バリアフリーとは、「バリア（障壁）」を「フリー（のぞく）」つまり障壁となるものを取り除き、生活しやすくすることを意味することが分かった。他に建物内の段差など、物理的な障壁の除去と言う意味合いから、より広い意味で用いられていることが分かった。

私は、バリアフリーについて知り、尾崎の町の良い所、困る所について班のみんなで調べたり、実際に尾崎をまわったりした。

まずは良い所、住みやすいなと思った所が三つ

あった。

それは、病院や公民館などいろんな人が使う施設には、坂やスロープがあることだ。

二つ目は、音のなる信号があることだ。音のなる信号があることで、目が見にくい人見えない人が信号を安全安心にわたれるように音のなる信号があるのだと思う。

三つ目は、点字ブロックがいろんな所にあることだ。点字ブロックがあることで目の見えない人が点字ブロックをたよりにし生活している方もいる。だから点字ブロックは必要で大事なのだ。

尾崎の町を見てたくさん住みやすい所を見つけた。けれど、困りそうだなと思つた所もみつけた。

一つ目は、段差が多い所だ。段差が多くあることで、車いすの方やたくさんの方が過ごしにくいと思う。

二つ目は、えん長用ボタンがある信号が少ないことだ。この信号が少ないことで、困る人がたくさんいるだろう。例えば、車いすの人や障がい者の方たちだ。えん長用ボタンがないせいで横断歩道をわた

れない人がいることが分かった。

私のおばあちゃんも毎日、散歩をしている。私も、休みの日に一緒に散歩をしているが、段差がある所にいくと、

「よいしょよ。」  
と少ししんどそうだ。

そこで、どんな町になったらいいか考えてみた。階段だけでなくスロープがあったり、道が広く通りやすかったりすると、だれもが住みやすい町だと思つた。

その町を創るためには、お金が必要なので税金を使つたりば金をしたりすることだ。

たくさんのお店にば金箱をおくだけではなく、ポスターでよびかけをして注目してもらつたらいいと思う。私が大人になったとき、またしっかり考えていきたいと思う。

さらに大事なものは、思いやりの心をもつことだ。困つた人がいたら、声をかけたいと思う。そして、何に困っているのかを一緒に考えたり、そのことが

解決できないかと行動したい。

いろんな人にとってもバリアフリーな町になったらしいなと思う。

## 友だちになりたい

御崎小学校二年 中間 千智

わたしは手話が好きです。そつ園するとき、クルスのみんなで「ありがとうの花」を手話で歌ったことがきっかけです。コロナがはやっていてこえを出すことができなかったけれど、みんなといっしょに歌を歌えたことがとってもうれしかったです。手話をつかうとき、さいしょはダンスをおどっているかんじでたのしかったです。あとから手話は耳がふじゆうな人のためのことばだと知りました。声をださなくても会話ができるところがカッコいいなと思います。思っていました、「耳が聞こえない」ということは、こまったこともあると考えました。

たとえば、こえをかけられたことに気づかず、なかよくしたい友だちに、むしっているとかんちがいされるかもしれません。いっしょにあそびたいのに、おたがい思いちがいをしてなかよくなれないかもしれません。そんなのかなしすぎます。

また、耳が聞こえないと生活するなかでひつような音にきづけません。いどうするときにきけんをしらせるクラクションや、家にだれかきたことを知らせるインターホンがわかりません。きつと「聞こえない」ということはわたしが思っているいじょうにこまることがたくさんあるのだと思います。

わたしは、七さいのたんじょうびプレゼントで手話の本をおねがいました。しゃんがたくさんついているので、そのまねをしながら手話をおぼえているところ。手話ができるようになったら、私は耳のふじゆうな人と話したいと思っています。耳がふじゆうな人と、わたしの友だちとみんなであつまって、たのしくおしゃべりしてみたいです。わたしが、手話でつうやくをします。もちろん、さいしょからかんぺきなつうやくにはなれないと思

ます。しらないことやひょうげんがきつとあると思います。そんなときは紙に書いたりして教えてもらいながらおぼえていきたいです。人と人とは話すことでつながっていきけると思います。手話は話すためのどうぐです。わたしは、手話をおぼえて、たくさんの人と友だちになっておしゃべりしたいです。

## わたしの考え

坂越小学校四年 上山 鈴 捺

わたしは、本で牛にゆうパックには、目が見えにくい人のことを考えたくぼみがあることを知り、「他にもこのような工夫がないのかな。」  
と調べてはじめました。

まず、インターネットでユニバーサルデザインについて知り、赤こう市にもユニバーサルデザインがあるのかを調べるためにしせつや公園に行きました。目が見えにくい人のための点字ブロックや階だ

んだん鼻しき別シート、車いすの人のためのスロープや広い通路など、赤こう市には数えきれないくらいたくさんユニバーサルデザインがあつて「だれもがくらしやすい町だな。」  
と思いました。

次に、小学校のじゅ業で耳がふ自由な人の話をききました。耳がふ自由な人は手話をして通やくの人を通して会話をしました。わたしは、手話を知らないで、通やくの人がいなかったら理かひできませんでした。耳がふ自由な人は、会話ができる相手がかぎられているので、どれだけユニバーサルデザインがあつても、

「もっと色々な人と話したいのではないかな。」  
と思いました。

最後に、図書館で、車いすののつて本をかりる体けんをしました。車いすの人が通りやすいように通路を広くしたり、だんさをなくしたりなどの工夫があつたけど、

「意外と使いにくいな。」  
と思つた場所が多かつたです。



車いすの人は毎日細い道を通る時はかべや人に当たらないように進んだり、少しのたんさもかい助者がいないと上がれなかったりして、

「生活しにくいのではないかな。大変だな。」  
と思いました。

わたしは、だれもがくらしやすい町にするための工夫がたくさんあると思ったけれど、しょうがいのある方に会ったり、車いすの体けんをしたりしたことで、まだまだしょうがいのある人には、くらしにくい町だと感じました。そして、  
「もっと車いすの人などのしょうがいをもつ人がくらしやすい町になってほしい。」  
と思いました。

そのために、わたしたちがまず、できることは、しょうがいのある人の気持ちやくらしなどを知ることが大事だと思いました。次に、その人のためにどんなことができるかを考えることも大事だと思いました。

だれのためのユニバーサルデザインかをもう一度考え、車いすせん用通路や手話ほんやくきなど新しく

いユニバーサルデザインが必要だと思いました。

さらに、赤こう市には、手話を教えてくれたり、文字を点字に変えてくれたりするたくさんのボランティアの人がいることを知り、  
「いつかさんかしてみたいな。」  
と思いました。

このように、わたしが今回考えたことをもつとたくさんの人が考えると、しょうがいのある人がさらにくらしやすい町になると思いました。これからもみんなで自分の住む町について考えていきたいと思いました。

## 「みんなが」住みやすい社会

高雄小学校五年 大地 慶

ぼくは、一学期の、総合的な学習を生かして、一番大事だと思ったことは、「みんなが」楽しく、「みんなが」住みやすくすることだと思っています。

これを読むみなさんは、「自分が」住みやすく、楽しく、生活できていたとしても、障がい者の方や、お年よりの方などの人たちが、住みにくいかんきょうだったら、どう思いますか。ぼくは絶対にいやです。きつとみなさんもそうだと思います。「自分達」だけではなく、「みんなが」住みやすくなれば、明るい社会になると思います。

ぼくは、一学期、総合的な学習で、スポーツ体験をしました。スポーツ体験といっても、「ボッチャ」「フライングディスク」といった、障がい者の方でも、楽しむことができるスポーツです。去年は「サウンドテーブルテニス」の体験や、「点字体験」「アイマスク体験」もしました。これまで多くの体験をしてきた中でも、多くの「みんなが」過ごしやすい取り組みがありました。例えばボッチャには、障がいが重い人でも楽しめるように、ランプという、スロープのような道具があります。目が不自由な人も読むことができる、点字もあります。このようなものがふえていくことで、よりよい社会になっていくのかなと思います。このような、「みんなが」過

ごしやすくなる取り組みに、「自分は関係ない」「別にやらなくてもいい」「他の人がやってくれるだろう」と思わず、できることのでいいので、積極的に参加することが大事だと思います。

ぼくの住む地域では、毎年「ふれあい清そう」という、ゴミ拾いの活動があります。小学生からお年よりの方まで、たくさんの方が参加します。みんな地域をきれいにして、「みんなが」気持ちよく過ごせるための活動です。このように、ぼくたちでもできる活動はあります。自分からやろうとするしせいは、福祉でも、とても大切なことなんだと思います。

お年よりや障がい者の方に、思いやりを持つことが、一番大切だとぼくは思います。わけは、思いやりがなければ、「みんなが」住みやすい、明るい社会にはならないと思ったからです。電車やバスで席をゆずったり、重そうな荷物を持っていたら持つてあげたりするなど、そんな「やさしさ」も「思いやり」です。ぼくも、そんな「人を思いやる」ということを、できるようになりたいです。

ぼくがこの作文を通して、伝えたいことは、「みんなが」楽しく、「みんなが」住みやすい社会にするために、努力していききたいということ、そして、「みんなが」協力して、取り組んでいききたいということです。

「みんなが」住みやすい社会は、一人がどうがんばったことで作れません。そのためにも、ぼくは、みんなが協力したいと思いました。

だからぼくも、思いやりを持って、生活していきたいです。

## 九十四才のひいおばあちゃん

有年小学校五年 田中結音

私には、九十四才のひいおばあちゃんがいます。私はお正月に毎年ひいおばあちゃんの家に行き会います。

ひいおばあちゃんは一人で、くらしています。ひ

いおばあちゃんはいつも私に優しくしてくれます。行きたびにとっても、うれしそうな笑顔でよろこんでくれます。私のひいおばあちゃんは笑顔がとってもにこみます。

私はそんなひいおばあちゃんが大好きです。

けれども、毎年会うたびにひいおばあちゃんの様子は変わっていました。私やお姉ちゃんの名前をわすれていました。すごく悲しかったです。

でも笑顔は変わりません。私はひいおばあちゃんの笑顔を見ると、心が明るくなり、うれしくなります。

最近、ひいおばあちゃんは、よくお母さんに、電話をかけてきます。お母さんは電話で、

「今日じゃないで…。」

後から聞けば曜日をまちがっていたみたいです。

ひいおばあちゃんはお母さんが働くデイサービスに行っています。決まった曜日に行きます。

「デイサービスのおむかえが来ない。」

と曜日をまちがえて電話をかけてきているみたいです。

ひいおばあちゃんは自分が曜日をまちがえてしまった事に、とてもショックを受けていました。

「おばあちゃん、ボケてまいようなあ。」

とひいおばあちゃんはいつものかわいい笑顔ではなく悲しそうな笑顔で言いました。

その笑顔を見て私も悲しくなりました。

ひいおばあちゃんは毎年会うごとに耳も遠くなっ  
ていきました。お母さんに

「大きな声で会話するんやで。」

と言われたけれど私は、はずかしくて、できません  
でした。でもお兄ちゃんは、大きな口でジェスチャー  
もして優しく会話していて、すごいと思いました。  
私もこれからは、ひいおばあちゃんと、たくさん会  
話できるように、工夫して努力したいです。

私の地いきでは、高れいしゃがふえてきています。  
私が一年生の時、近所のおばあさんが花だんでたお  
れていて、友達やお兄ちゃんと助けたけい験があり  
ます。

そのおばあさんの年れいは、わからないけど一人  
でくらしています。そのおばあさんは私に会うたび

にあいさつをしてくれれます。そして、

「あの時は、ありがとう。」

と言つていつも、うれしそうで私も会うたびに心が  
晴れます。

おばあさんが、けがなく無事で元気にすごしてい  
るすがたを見て、あの時助けて本当によかったと思  
います。

これからも近所の高れい者の方とふだんから、コ  
ミュニケーションをとつて、変化にいち早く気づけ  
たらなと思います。

そして、地いきの高れい者や自分のひいおばあ  
ちゃんに楽しい毎日を送つてほしいと思います。

## みんなおいでよーいきいきサロン

原小学校三年 三輪 みのり

わたしのおばあちゃんは、月一回、地区の集会所  
でいきいきサロンをひらいています。わたしもさん

かしています。

そこでは地いきの人が集まって体操やゲーム・切り絵など、色々な楽しい事をします。

今年で五年目だそうです。おばあちゃんは地区の集会所ができてここでみんなとゲームをしたりお話ししたりしたら楽しいな、地区の人どうしでもっとなかよくなれたらいいな、と書いていきいきサロンをはじめようとよびかけたそうです。

はじめてさんかした時、わたしは四さいでした。

さいしょは、はずかしくて何もできなかったけど、だんだん慣れていって、絵本の読みかさをさせてもらったり学校の話などを聞いてもらったりして楽しくなりました。そのおかげで地いきの人の事や名前などがわかるようになりました。

コロナウイルスがはやって、サロンをひらきたくてもひらけない時もありました。その時にはポストに、手紙や、のうトレのプリントなどをくばりました。

わたしは、その時に、お家でも、サロンをしていく気持ちになれたらいいなと、サロンでいつも会っ

ていた人たちの顔がうかびました。会えないけれどもうれしいし、つながっている気持ちになりました。

今では、わたしも小学三年生になり、イスを出したり、来た人をむかえたり、にもつをもったり、出きる事がふえました。

おばあちゃんは、もっとたくさんの人にきてもらえるよう、夏まつりをしたり、パン作り教室をしたりいろんな人にきょう力してもらいながら、アイデアを考えています。もつとなかよく、助けあいやきょう力ができる、地いきにしたいそうです。

おばあちゃんをみていて、いきいきサロンをひらくためにいろんなことを考えて、行動しているすがたが、かっこいいと思います。コロナのようなこまったことがあっても、今自分ができる事を考えて活動する力はすごいです。

今のわたしは、イスやおかしを出したり、後かたづけをしたり小さな事しかできないけど、自分のできる事をしてサロンの力になりたいです。

サロンでは、来ている人がとくいな事を先生になつて教えてくれたり、お年よりも子どもも、いっ

しよになって楽しんだりします。

楽しいと、わたしは少しむずかしい事もあきらめずがんばれます。

サロンに来ている人みんなが

「すごいね。前より上手になったよ。」

とほめてくれると次もがんばろうと思います。

お年よりの方は、すいかわりやわなげをみんなと  
いっしよにしよう、まけないぞと元気がわいてくる  
そうです。

すごいやる気パワーです。サロンは、来る人の力  
があつまって、みんなのパワーになるのだと思いま  
す。

そしてこのパワーがなかよく助けあう心につなが  
ると思います。

わたしはこれからも、サロンの一人としてできる  
事をつづけていきたいです。

赤穂中にサロン活動がひろがってえがおがいっぱ  
いの町になるといいなと思います。



## 中学生の部 大賞

### 幸せのランドセル

赤穂西中学校三年 岸 田 優 音

「いってきまーす！」

私の妹は、この春から小学校に入学しました。自分で選んだお気に入りのランドセルを背負い、毎朝元気に出発していきます。

子どもには、「子どもの権利条約」があり、すべての子どもが、子ども時代を自分らしく健康的に安心してゆたかに過ごせるよう五十四の条文が書かれています。その中に、教育を受ける権利というものがあります。ところが、世界には、教育を受けたくても受けられない子どもがたくさんいます。最近では、ロシアとウクライナの戦争のニュースを毎日のように目にします。学校が攻撃を受けたり、避難をする為に学校に行けない子がたくさんいるそうで

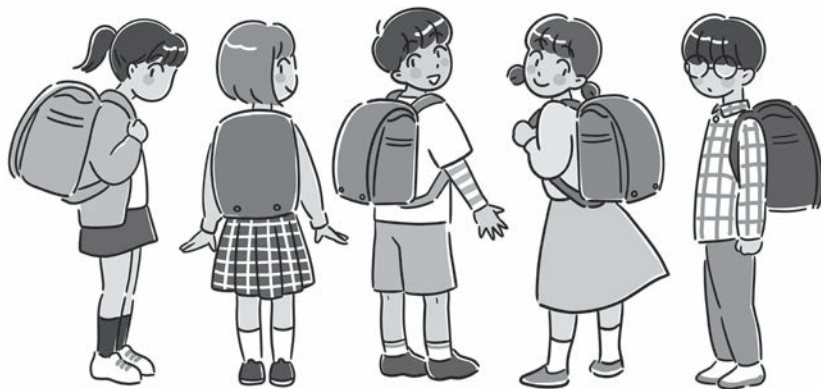
す。そんな世界の子どもの達の為に、私が何かできる事はないのだろうか？と思い、調べてみることにしました。すると、アフガニスタンの子ども達に、ランドセルを送る活動がある事を知りました。アフガニスタンの小学生は、まずしさの為、全員がカバンや文具をそろえられるわけではないそうです。実際に送られた時の写真を見ると、受けとったランドセルを大事そうに抱えている男の子。友達と見せ合いっこをしている女の子。どの子も目がキラキラと輝いています。日本で使われていたランドセルが海をこえてまた大切に使われているなんて、素敵だなと思いました。ところがアフガニスタンの学校は、屋根も机もイスもない所もあるそうです。地面に座ってランドセルを机にして勉強をするのです。そんな場所でも、どの子も真剣にノートをとったり先生の話の聞こえと一生懸命です。なぜ机もイスもない環境の中で集中して勉強をする事ができるのだろう。どうしてそこまでして勉強がしたいのだろう。それは、アフガニスタンの子ども達は知っているからです。学校へ行けば、読み書きができるようになる

るだけでなく、家族を病気や危険から守る事ができません。また、仕事を選ぶ事ができ、貧しい生活から抜け出す事ができるかもしれないのです。子ども達にとって学校は、未来へ繋がる希望なのです。そんな子ども達にチャンスを与えてきたのが日本のランドセルです。同じ村にランドセルを背負った子がいる事で、学校に行っていない子の親が自分の子ども学校に通わせたいという気持ちになるのだそうです。

私も使わなくなったランドセルを送ってみたいと思います。誰かが学校へ行けるきっかけになったらうれしいです。世界中の子ども達が、私の妹の様に、ランドセルや文具をそろえてもらって楽しく学校に通ったり、教育を受けられるようになってほしいです。

また、日本国内でも、様々な理由で学校へ通えない子がたくさんいます。家庭の事情を抱えていたり、いじめに直面していたり、学校に通っていても十分な学びを得られない状況に陥っていたり。そんな子ども達の、学校へ行って学びたい!!という叫びを聞き逃さない事が大切なのではないかと思えます。

個々の子ども達の状況に応じて、この権利をいかにして守れるのかを考え、誰もが適切なサポートを受けられる事ができる世の中になってほしいです。





## みんなが平等で安心できる社会へ

赤穂東中学校二年 山本 真奈美

皆さんは障がい者について考えたことはありませんか。きつと一度は考えたことがあると思います。

私はこの間、関西福祉大学で福祉体験をさせていただきました。この時の講義や体験を元に、高齢者の方たちや障がいを持っている人のことについて改めて考えるきっかけになりました。講義では、子供から高齢者までのすべての意思が尊重されるような社会を目指すために、相手と対等な立場で対話すると共に一緒に考えることがとても大切だということや学ぶことができました。福祉体験では、タッチング体験、車いす体験、フレイル体験の三つの体験をさせていただきました。

タッチング体験では、言葉だけでなくハイタッチ

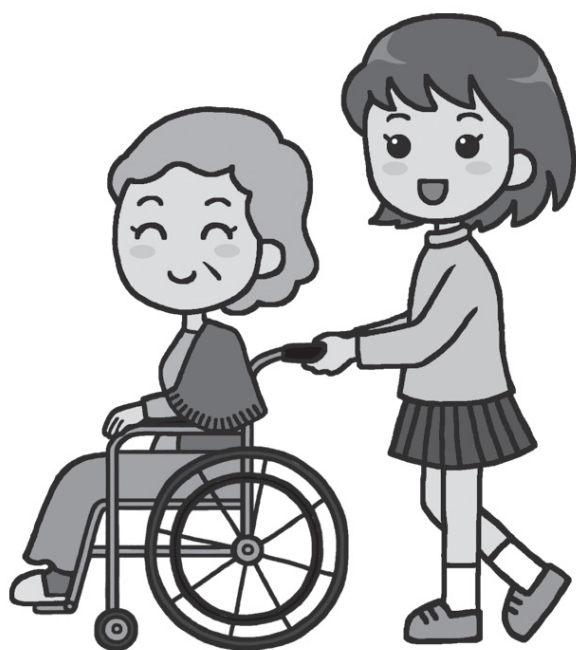
や肩たたき、握手などで相手と触れ合うことで、言葉を交わさなくても相手に自分の気持ちを伝えることができるとを学習しました。

車いす体験では、ちよつとした段差や坂道など普段私たちは不安を感じないけど、車いすを利用して人にとっては大きなバリアとなっていること、車いすの操作方法や段差を登ったり降りたりする時の注意点を知ることができました。そして、車いすを押す時には相手の立場になり、安心して乗ってもらえるサポートができるよう声かけをしたり、急発進や急ブレーキをしないように心がけ、周りにも気を配ることが大切だということを実際に乗ったりおしたりして体験することができました。

フレイル体験では、フレイルとは健康な状態と要介護状態の中でありそれを予防するため私の住んでいる赤穂市でも、え（栄養）こ（口腔）う（運動）し（社会参加）といった取り組みが行われているということも知ることができました。また、食事、睡眠、運動、社会参加は認知機能の回復に役立つことが分かりました。

この講義や体験を通して、障がいがある人もない人もみんな平等であり、一緒に考え行動することでみんなが安心して生活が送れることに繋がると思いました。そして、みんなが安心して暮らせるように困っている人がいたら少しの勇気を持って、自分が今何をすればいいのかを考え行動していくことが必要だと思いました。今、私たちの身の回りでは共生社会に向けてバリアフリーなどが増えてきていると思います。しかし、スーパ―などの駐車場で障がい者や高齢者専用の駐車場に車を止めている人や電車などで優先席を譲らない人もたまに見かけます。そのため、バリアフリーのことだけでなく周りの人も障がいをもっている人について考えて行動する必要があると思います。また、子供、大人、高齢者、障がい者など人それぞれ困ることや考え方は異なります。だからこそ、困っている人がいたらサポートしあったりしていくことが大切だと思います。そして、みんなが障がいを持っていて人について理解し、平等で安心して過ごすことができる社会にしていく必要があると感じました。そのためにも、私

自身も周りの人に平等に接するように心がけたり、障がいを持っていて人などを含めて困っている人がいたら少しでもサポートできるようにしていきたいです。



## 中学生の部 入選

### 愛でいっぱい

赤穂西中学校三年 山之口 美 咲

「孤独な魂に出会うと、自由と知性のあふれる世界にかならず導いてあげる、それが愛。」これは、病気が原因で視力と聴力を失った作家のヘレン・ケラーという一人の女性の言葉である。今、世界では、彼女のように障がいと共に生きている人が約十億人もいる。では、その十億人の人々は、私たちと同じような生活が送れていると言えるのだろうか。そうとは言えない問題が山のようにたくさんあるのだ。ここで私は、障がい者が直面する問題について調べてみた。その中でも私が思う一番改善しなければいけない問題を三つ挙げることにした。

一つ目は、障がいに対する社会の理解がうすいことだ。実際に私も、この問題をテーマにしたことで

障がい者や障がいのことを色々調べるようになったが、もしも、このテーマを選んでなかった場合、障がいについて、全く調べることはなく、そのような知識もなかったと思う。今の現状は、このテーマに取り組む前の私のような人々がいること。そうなることで、いつになっても障がいについての理解を深めることができずに他人事になってしまう。また、町中で障がい者の方を見かけても「自分が手伝って良いのか」や「余計なお世話にならないのか」など、不安な気持ちで勝って援助をためらってしまう人も多くいるだろう。そのためにも、援助や声かけの仕方などを学べる機会を設けるのも一つの改善策ではないのだろうか。

二つ目は、障がいを理由にしたサービス提供の拒否だ。このことについて、私はまず思った。なぜ、障がいというものを持っているだけで、サービス提供を拒否するのだろうか。障がい者だって、私たちと同じ人間であることは変わらない。だから同じ扱いを受けるべきだ。こう思った。私たちのような何不自由なく暮らせている日常の中には、障がい者に

とつての大きな壁があるということ。だからまずは、この問題と向き合っていくことが今後求められるのだ。

三つ目は、盲導犬の入店等の拒否だ。多くの人がおそらく知識としてある盲導犬。私の住んでいる町では盲導犬を見かけることはあまりないが、東京へ行った際に、一度見かけたことがある。その時の盲導犬を見て感じたことは、しっかりと飼い主を誘導しながら、危険から守っていて、一番近くで寄りそっていると感じた。しかし、盲導犬といると安心しちゃうと思っていた人もそう少なくなはないだろう。盲導犬でも完璧に安全を守ってくれるのは難しいのだ。盲導犬は、見て分かる通り、犬だ。犬だから、人間と同じ視線で歩くことができない。そのため、視覚障がい者は、トラックなどのサイドミラーに頭をぶつけることがあるのだ。つまり、盲導犬の弱点は、目の高さが低いことだ。しかし、その逆を言うと、目の高さが低いことで、足元の障がい物をよけたり、段差を教えたりすることができるのだ。そのため、盲導犬と視覚障がい者のためにも、道に自転車や車

を止めないように対策をとるべきだ。

また、ほとんどの人が意識して見たことがないだろう。実は、盲導犬は視覚障がい者の左側を歩いているのだ。その理由は、障がい物の多い左側に盲導犬がいた方が、より確実に安全に避けることができるからだ。このようなちよつとした知識でも、知っておくことが必要だと思う。

三つの問題から考えられることは、固定観念をなくして考えを見直すことだと思う。周りが皆そう思っているから、自分も同じようにその考えに乗っかるのではなくて、自分の考えを持ち、もし仮に、その考えがまちがっていたとしたら、また正しい考えをつくれれば良いのだ。人に流されずに、自分の考えをもち続けることが大切だと思う。また、そこで終わるのではなくて、そこから、行動に移して実際に援助できるまでになることが、私の思う考えだ。

私は、もっと多くの人に、障がい者の方々について知ってもらいたいと思っている。もちろん、世界には、自分と全く同じ考えを持っている人なんていない。それでも、同じ地球に住んでいる一人として、

この問題に多くの人が向き合ってほしいと思うている。いや、きつと向き合う日は必ず来るだろう。

## 私の弟

赤穂東中学校一年 後 藤 結 愛

私の弟は、現在小学三年生で八才です。弟は二才の時に、大きな事故にありました。私の小学校入学式の前日でした。今でも忘れられない出来事です。

弟はその事故で、きせき的に助かりましたが、脳内出血を起こし、右半身にまひが残りました。歩いていた弟は、その事故により、自分で座ることもできなくなりました。

神戸の病院に運ばれ、二ヶ月間入院をしました。運ばれた日は、危険な状態であり、意識が戻るかわからない状態だったと母に聞きました。次の日、入学式を終えてから家族みんなで神戸の病院へ向かいました。私は子どもだったので、弟に会うこともで

きず、悲しかったのを今でも覚えています。そんな弟も、三日後に意識を戻し、母が撮った動画を見せてもらい、みんなで大喜びしました。弟は、二ヶ月間、一人で神戸の病院で頑張り、赤穂の病院に帰って来れることになりました。そこからは、お母さんとずっと一緒に、リハビリを頑張り、自分で座ることもできなかつたのに、座ることができるようになり、歩く練習もするようになりました。

命が助かっただけでも奇跡なのに、右半身が少し不自由なだけで、歩いたり、少し走ったりするまでに回復しました。母から、リハビリも、泣いてしたくない時もあったと聞きました。私の弟は、とても頑張り屋さんで、弟が頑張ってきたからこそ、ここまでできるようになったのだと私は思っています。私の自まん弟です。

弟が、身体障がい者になり、私は、体の不自由な人のためにいろいろな制度があることを知りました。なんとなくスーパーに買い物に行ったとき、駐車場にある車イスマークなど、今まで知らなかったことがたくさんありました。歩道にある点字ブロッ

ク、それは目が不自由な人のためにある物。日々生活を送る中で、いろいろなことが気になるようになってきました。

弟が良い歩き方ができるようにする装具を作るときも、たくさんお金が必要だけど、医りよう保険がきき、負担もしてくれるのでとても助かる、と母が言っていました。障がいのある人に対して、いろいろな制度があることを知り、とても温かい国だなと感じました。

弟は、右半身にまひがあるけど、まだまだみんなと同じように走ったり、普通に歩いたり、何でも自分でできるようになることをあきらめていません。事故にあつてからたくさんさんの奇跡を見せてくれました。座ることすらできなかったのに、一人で歩くことが出来るまでに回復しています。運動会でも、みんなと同じ距離を走っています。弟も小学校三年生になり、私に生意気なことを言うので腹を立て、きつく当たってしまうことがよくあります。そんな時、今まで弟が頑張ってきたことを思い出し、後悔します。いつもそのことを忘れてしまう私…。

自まんの弟にもっと優しくしないといけないと反省しています。



## 中学生の部 佳作

### 今、どきどき

赤穂中学校三年 林 那菜子

「じいじ!」「大丈夫!」平成29年5月20日。いちご畑で突然じいじが倒れた。いとこと私を連れていちご狩りに行ったときだった。それから5カ月後の退院。じいじは脳梗塞だった。ときどき会いには行っていたが、左側に麻痺が残っており帰ってきたじいじは杖がなくては歩けない状態だった。小さな段差にもつまずき、ものを言うときにもずいぶんとゆっくり話していた。倒れるまでは自動車の運転はもちろん、自分のことも自分でできていたはずだったのに。

私がまだ小さい頃、私はなかなか上手く自転車に乗ることができなかつた。そんな私に「大丈夫」「大丈夫」と声をかけて励ましてくれた。一緒にたくさ

ん練習して乗れるようになった時には自分の事のように喜んでくれた。地域の祭りもよく一緒に行った。人が多かった時には肩車までしてくれたのをよく覚えていた。しかし、今は車は乗れないし自転車にも乗れない。あんなに一生懸命に教えてくれたのにまるでうそみたいだ。

中学生になり、トライやるウィークというものがあると知った。私は「ここに行きたい」そう思った。それは、「はくほう会」だ。ここならじいじみたいな人の手伝いができると思った。しかし、行ってみておどろいた。なぜなら、割と元気な人が多かったからだ。もちろん車いすに乗っている人もいたが、いすにふつうに座っている人がほとんどだったのだ。さらに、かざり付けがきれいにされているなあと思っていたら、それは利用者さんがつくったそうだ。これにはとてもおどろいた。なぜ利用者さんがやっているのか聞いてみることにした。すると「手先を使うことで頭の活性化にもつながるし、旬のものを作ることによって季節も感じられるの。」と笑顔で教えてくれた。言われてみると確かにそうだ。

これなら寝たきりの人でも季節のものを楽しむことができる。そして自分ですることではしか味わうことができない達成感も感じられる。誰かの世話をするということが誰かを幸せにできるんだと知った。また一人一人違う利用者さんと向き合っている職員さんはかっこいいなと思った。

工夫といえば、私たちの身近な所にもまだまだできることがある。例えば点字ブロックだ。目の不自由な人にはとても便利で、なくてはならないものだと思う。しかし通行人からすると少し不便だ。つまずきやすく、すべりやすい。杖を使う人からすればなおさらだ。雨が降ればよりすべりやすくなってしまふ。

他に、信号機も一つ挙げられる。都会や駅の近くには音楽の鳴る信号はあるのに、それ以外にはほとんど見られない。これでは自由に安心して行けない。自分でできるようになったことを見つけたのは楽しいが、逆にできなくなったことを知るの怖い。しかしその怖さを少しでもやわらげることができたらそれが幸せになると思う。そしてこれは私たちに

もいずれ訪れることである。いつか自分にそのときがやってきた時に、不自由が少ない社会で、一人一つの幸せが在るようにしたい。

## 僕もおばあちゃんのように

赤穂西中学校二年 豊岡 悠燈

僕は高齢者の方と障がいのある方について考えてみました。

僕のおばあちゃんは介護の仕事をしています。介護につこうと思った理由はいろいろあるそうですが、その内の一つは、おじいちゃんがある時から障がいをもってしまい亡くなるまでの日々を介護をして過ごし、一人になってその経験を生かし誰かの役に立てられたらと思ったそうです。

おじいちゃんは、病気と事故の後遺症で長く入院を繰り返していました。事故にあった際に頭を強く打ったことで、高次脳機能障害という後遺症を



持ってしまった、それにより歩くことはおろかあらゆることができなくなり、たくさんリハビリをしてなんとか歩けるようになりましたが、不安の残る中で退院となりました。

何よりの問題は自宅でのお風呂でした。浴室に少し大きな段差があること、30cm近くも身長差のあるおじいちゃんをおばあちゃんが一人で入浴させるのは絶対に無理でした。体をタオルでふくだけの日もあったけど、どうしてもさっぱりしないしおばあちゃんが一人で世話するのに限界がきて、デイサービスなどを利用し始めました。

スタッフの方は、朝9時頃までに利用者の方を自宅まで迎えに来てくださり、帰りも4時頃から自宅まで送ってくださいます。デイサービスに行くと、順番にお風呂に入れてもらうそうです。おじいちゃんも、とても気持ちよかったとうれしそうに話をしてくれました。それから色々なことをしておやつを食べて帰りの時間になるそうです。

おじいちゃんは脳に障がいがあったけれどスタッフの方達の顔を全員覚えていました。スタッフのみ

なさんが親切にしてくれることをよくおばあちゃんに話したそうです。

デイサービスを利用するようになって、毎日食事の世話と身の回りの世話をしているおばあちゃんはそのすごく楽になっているのか、お母さんやおじいさん、おばあさんで話すことができました。毎日、身の回りの世話をするのは体力的にも精神的にも大変だと思えます。僕だったら、しっかりとできるかどうか不安でとても自信がありません。だから、デイサービスのスタッフの方達を尊敬しています。

今おばあちゃんが働いているところもそうです。体が障がいのある人も利用する施設には、手が動かせない人、歩けない人、目の見えない人、耳が聞こえない人など様々な事情で施設に入っている方がいます。

何年か前のニュースで、障がい者の方が入所している施設で多くの方々が亡くなってしまう事件がありました。事件を起こした人は、施設に勤めていたことがある人だったと聞きました。それをニュースで聞いたとき、とてもびっくりしました。たとえ

寝たきりで誰かにお世話をしてもらわないと生活できない人でも、楽しく生活する権利はあると思います。だから、このような事件がもう2度と起こらないようにしてほしいと思いました。

また、高齢者の方が施設に勤めている人にケガをさせられる事件をニュースで見たこともあります。とても若い人に力が敵わない高齢者が辛い思いをしていると考えると悲しいです。施設に勤めているスタッフの人が加害者になることもあるので、さらに悲しいです。精神的な障がいがある人もいます。そのような方のために話を聞いてあげるカウンセラーの方がいます。昔、お父さんが「人に話すと言うことは、嫌な思いを自分から離すことでもあるから、何かあったら人に聞いてもらうことも大切やで」と教えてくれました。だから人の話を聞いてあげることはとてもいいことだと思うので、僕も誰かの気持ちを少しでも軽くできるようなれたらと思います。

高齢者や障がい者について考えて改めて思ったことは、高齢者も障がい者も楽しく生活する権利があ

り、できない事を手伝ってもらうことで楽しく生活できるといことです。だからこそ世話をめんどろに思わず、困っている人のお手伝いをするのが大切だと思いました。

## 障がい者と共に生活する社会を目指して

赤穂東中学校二年 畑 本 茉莉香

あなたは聴覚障がい者についてどのようなことを知っていますか。耳が聞こえない、手話をしているなど基本的なことは知っていると思います。しかし、一口に聴覚障がい者と言ってもいろんな人がいます。生まれつき聞こえない人、途中から聞こえなくなつた人。完全に音が聞こえない人、ぼんやりと音が聞こえる人などさまざまです。

そんな聴覚障がい者が不便に感じていることはたくさんあります。まず一番は音が聞こえないことです。特に車のクラクションや緊急時の警報音が聞こ

えないと命にかかわることもあります。二つ目は外見だけでは聴覚障がい者だと気づいてもらえないことです。白杖を使っている視覚障がい者や車いすに乗っている肢体不自由者と比べると一見しただけでは分かりにくいのが聴覚障がい者です。そのため、初めて会った人に普通にしゃべりかけられて困ることが多いそうです。三つ目は他の障がいに比べてコミュニケーションがとりにくいことです。声で会話をしている私たちとその声が聞こえない聴覚障がい者がコミュニケーションをとるのはとても難しいです。最近ではコロナ禍でマスクをつける人が多く、読唇術を使ってコミュニケーションをとっていた人は苦労しています。

では、私たちは聴覚障がい者のために何ができるのでしょうか。まず初めは困っている聴覚障がい者を見て見ぬふりをしないことだと思います。障がい者ではなくても声をかけるのは勇気がいると思います。しかし、ほんの少し手を差し出すだけでも聴覚障がい者の助けになるのではないのでしょうか。また、コミュニケーションをとる時に気をつけな

いけないことはたくさんあります。聴覚障がい者の中にも手話をする人、読唇術を使う人などさまざまです。その中でも私たちが一番簡単にできる方法は筆談だと思います。筆談をする時は必ず相手の表情を確認しなければいけません。なぜなら、意味を理解していないまま話を進められると聴覚障がい者が困ってしまうからです。そうならないためには言葉を単純化したり、短文にまとめるなど色々な工夫をするのが良いのではないかと考えます。

では、聴覚障がい者のために公共の場に設置できる設備はどんなものがあるのでしょうか。聴覚障がい者が不便に感じるものの一つに緊急時のアナウンスが聞こえないというものがあります。そのため、聴覚的に促えるアナウンスだけでなく、視覚的に促えることができるものを使って、危険を知らせる必要があります。私は文字で知らせるより、光を使って知らせる方が良いと思います。なぜなら、文字は読むのに時間がかかるけど、光ならより短い時間で危険を知らせることができると考えたからです。光を使うことは聴覚障がい者だけでなく、耳が遠い高齢

者にも役立つと思います。

聴覚障がい者を含む障がい者を理解することはとても難しいと思います。しかし、ほんの少しの手助けだけで救われている人もいます。私は障がい者だからといった差別を減らし、共に生活できる社会になれば良いと思います。そのためにも、障がい者の人に対して、小さいことでもいいから何かできることを行っていきたいです。

## 「こしよく」について考えた〜一人じゃないよ

坂越中学校一年 宮本 暖加

小学生の時、授業で「こしよく」の勉強をしたことを覚えている。先日、家族とごはんを食べながら、お箸の持ち方の話になった。その時、「こしよく」をしていると、お箸の持ち方が悪くなったり、食べ方が乱雑になったりするといった話を思い出した。なぜ「こしよく」は悪いのか、どのような悪いこと

が起こってしまうのかを考えてみた。

「こしよく」は孤食・子食・小食・個食・濃食・固食・粉食と色々な漢字で表されている。孤食は家族が不在で一人で食べる。子食は子供だけで食べる、小食は一回の食事量が少ない、個食は家族がそれぞれ別のものを食べる、濃食は加工品など塩分や糖分が高いものを食べる、固食は決まったものや好きな物だけを食べる、粉食は小麦粉やバターを使った高カロリーのを食べるということだ。それぞれ子供の成長にとって良くないことが書かれていた。その中でも最も悪いとされる孤食の原因は核家族化、両親の共働きやひとり親家庭の増加が最も大きく、それが親とのコミュニケーション不足を生んで、人格形成に悪影響を与えているということだ。

私の家は核家族で両親は共働きだ。だから時々姉妹だけや一人だけでごはんを食べる時がある。特に夏休みやサッカーの練習終わりの夜に食べる時だ。子食で濃食や粉食の時は結構あるけど、孤食と思っただことはあまり無い。それは両親がちよつとした工夫をして一人じゃないと伝えてくれているからだ。

その工夫とは、短いけれど手紙を置いておくことだ。「しつかり食べて、宿題がんば」とか、「おにぎり握つといたから、電車で食べてね」といった簡単な言葉だけど、私はそれをみながらお母さんの作った料理を食べることで、一人じゃないと思えている。特に夏休みは近所に住むおばあちゃんに頼んで、毎日昼ご飯を作りに来てもらっていた。冷凍チャーハンやハンバーガーの時もあったけど、おばあちゃんが一緒に家に居てくれて、話をするのでとても楽しくごはんが食べられた。けれど、少し嫌な時もある。食べ残しをしたり、食べる姿勢が悪い時に注意される時だ。でも、注意されて「これはダメなんだ」と知ることが、私の成長にとっては良いことのように思う。人に怒られること、人に腹を立てること、自分自身で納得することもコミュニケーションの一つであり、孤食では経験できないことだと思う。

今年から、お兄ちゃんが大学に進学し、離れたところで一人暮らしを始めた。一人でごはんを食べるのがなれていない時は、よくテレビ電話で話しながらごはんを食べた。それから徐々に写真を送って

るだけになり、最近あまり連絡をしてこないようになった。一人で食べることが当たり前になったのかなと少し安心していた。この前家に帰ってきたお兄ちゃんにその話をする、「さみしくない訳ないやん」と言っていた。お兄ちゃんは一人で食べたくなくて、先輩や友達といっしょにごはんを食べることが多くなったそう。いつもは明るいお兄ちゃんでも、孤食をするるととても暗い感じになってしまうことがわかった。

お兄ちゃんと同じで、孤食をしている人は、だいたいさみしいと感じていると思う。大人も同じで、コロナ禍でオンライン飲み会をするのも、だれかと食べることを望んでいるからだと思う。けれど、さみしい孤食をなかなか解消できないのが高齢者だ。私の家の近所には一人暮らしのおばあちゃんがいる。家族は遠くに住んでおり、一人でごはんを食べているそう。一人で毎日ごはんを食べている様子を想像すると、なんだかさみしくて、悲しい気持ちになる。なんとかしてあげたいと思うけれど、私にできることは少ない。そこで考えたのは、ごは

んはいっしょに食べられないけど、顔を合わせたら笑顔であいさつをしつかりして、「一人じゃないよ」と伝えることだ。毎朝同じ時間にゴミを捨てにくるおばあちゃんに、明日からもしつかりと大きな声であいさつを続けていこうと考えている。

## おじいちゃんとの別れで考えたこと

有年中学校一年 小 河 拓 夢

僕が思う人権とは、皆が平等で幸せに暮らすために必ず必要なことだと思います。インターネットで調べると、人権とは誰もが生まれながらにして持っている、人が人として社会の中で自由に考え、自由に行動し、幸福に暮らせる権利と書いてありました。人は幸せに暮らすために様々な願いを持っています。「幸せに暮らす権利」とありますが、僕は死ぬ時にも人権は大切にされるべきだと思います。

僕のおじいちゃんは今年の二月に亡くなりました

た。一年前までは元気だったおじいちゃんががんになり、治療のために入院し、病院でコロナウイルス感染症にかかってしまい、そのまま亡くなりました。今年のお正月はちょうど入院する前だったので千葉にいる伯父家族も帰省してきました。まだコロナ禍でしたが、四年ぶりの帰省でした。おじいちゃん自分です、がんでいつ死ぬか分からないから帰ってきてほしいと頼んだそうです。その時はおじいちゃんも久しぶりに会えてうれしそうでした。

そしてお正月が終わり、おじいちゃんは、入院しました。抗がん剤の治療がしんどくて、毎日、一日に何度も、

「早く帰りたい。ここにいたら死んでしまうから迎えにきて。」

と、電話をかけてきました。おばあちゃんやお母さんは、家に帰ってきてもらうことを考えていたのですが、その時には抗がん剤の副作用で血液検査の結果が悪く、退院させてもらえませんでした。それから電話をかけてきて、おばあちゃんが帰れないことを説明すると、

「迎えに来てくれないんだったらタクシー呼んでひ  
とりで帰るわ。」

と言っていました。それから電話はかかってきま  
したが、「最近、電話が少なくなっただな」と思っ  
たら、病院からおじいちゃんがコロナにかかっ  
たと電話が入りました。それでも「帰りたい」と電話  
がかかってきたので、

「コロナになったんだから、今は無理なんやで」  
とくり返し説明したそうです。

そして二月に入って少し経った時、電話がかかっ  
てきました。

「今日でも明日でも面会来られますか。」

と言われました。まだコロナ対策で、おじいちゃん  
は隔離され、面会もできない状態でしたが、かなり  
状態が悪かったので特別におばあちゃんとお父さん  
だけ許可されました。

面会の時おじいちゃんは、おばあちゃんが話しか  
けてもうなずくのがやっとなりましたが、一言だけ、  
「ありがとう。」

と言ったそうです。

おばあちゃんは、後でいろんな人にこの話をして  
いました。僕は、この話を聞いた時、おじいちゃん  
がありがとうと伝えられて本当によかったと思っ  
し、おばあちゃんも悔いが少なく、言葉がうれしかっ  
たからいろんな人に話していたのだと思います。そ  
の面会は、おばあちゃんや残された人がこの先幸せ  
に生きていくために大切だったと思います。

おじいちゃんは最後まで思いを大切にしてもらえ  
たと思うし、それは、病院でおじいちゃんに関わっ  
てくださった人々が、おじいちゃんや家族の人権を  
大切に考えてくださったということだと思います。  
だからぼくは死ぬときまで人権は大切にされるべき  
だと思います。

## 高校生以上の部 大賞

### 僕の母親

赤穂高等学校一年 木島 優成

僕の母親は筋ジストロフィーという病気を患っています。筋ジストロフィーとは、遺伝子の変異によって体の筋肉が徐々に壊れ、筋力が衰えていく病気のことです。僕の母親は病気の影響で足に障がいを持っており、走ることができません。外出する時は杖を必ず持ち歩いています。しかし、杖を使っている時も段差のない場所ですまずいて転倒することはあります。本人は「急に力が抜けてしまう時がある。どうしようもできないんだよ。」と言っていました。この話を聞いた時に僕は「とてもつらく大変な思いをしているんだらうな。」と思いました。

僕は母親と外出することがよくあります。その時に感じたことが三つあります。一つ目は、母親が転

倒した時の周りの人の反応が冷たいことです。僕の母親は足が不自由なので一度転倒してしまうと自力で立ち上がることができません。その時に母親を立たそうと持ち上げたりしてみても僕の力では持ち上げることができません。誰かに助けを求めたりもしますが、大体の人は冷たい視線を僕達に向けて去っていきます。このようなことをされるとすごく傷つくし、変な注目を浴びて恥ずかしい気持ちになります。僕はつらい気持ちでいっぱいになりますが、母親が一番つらいと思います。もし、困っている人がいたら無視をせず一声かけて助けてほしいです。二つ目は見た目だけで人を判断しないでほしいことです。この話は母親が杖を使用していなかった頃の話です。母親は外出中は多目的トイレを使うのですが、トイレを終えてドアを開けたとき目の前に車いすに乗ったおばあさんとおばあさんを介護する人の2人が立っていて「なんで多目的トイレ使っているんですか。明らかに健康ですよ。」と言われたそうです。これを聞いた母親はものすごくショックを受けていました。見た目は健康に見えても体のどこかが不健



康だったり心が不健康だったりと目には見えない問題を抱えている人はたくさんいると思います。人の外見だけを見るのではなく中身も見てくれる人が増えてほしいです。三つ目は赤穂高校の先生方の優しさです。入学説明会や入学式は体育館で行いましたが、二階に体育館があったり階段がたくさんあったりと困っていた時に先生方が母親を車いすに乗せて運んでくれて「困ったことがあれば何でも言うてください。」と心配までしてくれました。お陰で赤穂高校のことが好きになりました。人の温もりに触れることはこんなにも嬉しく、安心できるものなんだと思いました。

僕の母親が患っている病気は現在の時点ではまだ治療法がなく、日が続つにつれて症状が進行していく難病です。十年後二十年後三十年後、母親はどうなっているのか分かりません。正直なところ、怖いし不安です。けど、僕の母親がそんな病気のことを全て忘れるくらい毎日が楽しい生活にしたいです。僕が母親を全面的にサポートできるように頑張ります。

## 高校生以上の部 特選

### 私の身近な福祉

赤穂高等学校一年 坪本光叶

私の祖母は今、六十八歳です。地域の民生委員という活動をしています。民生委員の活動内容は、「地域の高齢者、障がい者、児童、母子世帯などの要援護者の調査・実態把握、相談支援を行ったり、各地域の行事への参加協力や自主的な地域活動等、幅広い活動」を行うそうです。最近では、核家族世帯が増え地域でのつながりが少なくなってきた、さまざまな悩みを抱えていても、周囲に相談しにくい時代ですが、地域の民生委員さんは、身近な相談相手として、必要な支援を行ってくれる存在だそうです。そんな民生委員の仕事ですから、祖母も日々、福祉について学習しています。困っている地域の方に、最善な援助や助言ができるように、いろいろな講習

などに出向いています。

家の台所のところに、カレンダーがあり、そこに祖母のスケジュールが書いてありますが、独居の高齢者宅への訪問や、お弁当の配達、講習会や地域の老人センターへの見学会に参加し、いろんな方々と連絡を取り合っているようです。

令和の時代になり、スマホなどのインターネットでの情報の世の中が日々進化していく毎日ですが、高齢の方や困っている方には、祖母のように、対面で話を聞き、いろんな支援の先への橋渡しをしてくれる福祉というのは、とても重要だろうと思います。テレビでは毎日のように悲しいニュースを目にしますが、今はいろんなところに相談窓口もあるし支援してくれるところは多いのに、どうしてそこへ相談して助けてもらわないのかと、不思議に思うことがたくさんありました。介護に疲れて事件を起こしてしまったり、母子世帯での生活の困窮など、とても辛いニュースが流れてきます。きっと、そういう方にはインターネットの使い方が分からなかったり使えなかったり、支援先へとつながらないといった

ことが、あるのだと思います。

そのようなときに、地域には、相談できる他人がいるということをもっともっと認知されていったらいいなと私は思います。そうすれば、その状況に応じた支援を受けられるように協力してくれると思います。そして話を聞いてもらえるだけで、心がすこし楽になると思います。民生委員の活動は、老人施設や病院、いろいろな施設への窓口にもなり今、本当に必要な支援へとつなげてくれるそうです。とても大変な活動ですが、頑張って活動する祖母は、本当にすごいと思います。

今、私の住む地域では、とても高齢化が進み、過疎化が深刻です。その結果、何が困るかというところ、少ない若者の人数で多くの高齢の方のサポートをする必要があります。負担が大きくなります。独居の方も増え、この先私の地域では、民生委員の活動だけではそれぞれの悩みに向き合うことが難しくなるかもしれません。だからといって近所の付き合いが薄れていく中、となり同士で助け合いましょうというのも無理なことのように思います。若い人たちに声を

かけ合おうといったところでどうにかなるとも思いませんが、このままでは少子化にも拍車がかかり、私の地域では困りごとの多い方がより増えていくかもしれません。何か方法はないかと考えましたが、なかなか糸口が見つからないのです。

しかし、この先の未来を考えたときに、いずれ、私の祖母や祖父が安心して暮らしていくために、少しでも私ができることをやっつけていこうと思います。祖母のように、他人に声をかけに行ったり、人の悩みを聞いてあげたりすることはできないかもしれないです。しかし、私が大人になるころ、もしかしたら祖父達は、車に乗って買い物に行くことが難しくなっているかもしれません。その時には一緒に行ってあげたいし、困っていることがあれば、話を聞いて助けて、できることを一つ一つしてあげたいなと思っています。

世の中、全員が幸せになるというのは、難しいことかもしれないけれど、安心して生活できるということは、叶うような気がしています。仕事がしたくても出来ない人には、食べ物や住居などの支援、子

育て支援、生活支援など。支援を受けることは、はずかしいことではなく、助け合ってみんなが安心できる世の中になってほしいです。私が困って助けてもらいたい時が来るかもしれません。だからそれまでに、自分が出れることを、していきたいと思っています。



## 私ができること

赤穂高等学校一年 大高 莉 奏

コロナが流行する前、私が小学生の頃、私の母は毎週木曜日の午前中に赤穂の福祉会館にハンドベルの練習に相生から通っていました。そのグループの名前は「フレンズ&ベル」といいます。私も就学前は母に付いて行き一緒にハンドベルの練習に参加していました。ベルのメンバーの中には、盲目の方がふたりいます。ひとりは、他のメンバーの方と腕を組んで行動しています。十月のある日、施設訪問への移動中のことです。「この辺は、色とりどりの秋桜でいっぱいなんやね。」と言われ「きれいですよね。」と答えた私ですが、幼い頃の私は目が見えないことに気付いてなく会話をしていました。今になってから分かるのですが、目が見えていなくて五

感の一つが失われていても、風やかおりによって風景を想い浮かべる事ができるのだと、とても感動しました。

そして、もうひとりの方はグループの代表者で、いつも盲導犬のフォンクと一緒に行動していました。盲導犬にさわるうとすると、母にダメと言われてしまいでだろうと思っていました。盲導犬はハーネスをしているときはお仕事なので一緒に遊べないよ。犬が「遊んでくれるかな？」と勘違いしてしまうからあまり目も合わしちゃいけないと教えてもらい納得しました。私達の休憩中はフォンクも休憩中なので、頭をなでたりして一緒に遊ぶことができません。私はこの時間が一番好きでした。

実際のハンドベルの練習では、点字の楽譜を使います。ベルは基本両手で持ちます。点字を使っているふたりは、片手で音を確認しながら片手でベルを持ち、とても大変そうでした。ですが、周りの方がサポートしていてすてきなと感じました。

私は、目の見えない方の気持ちに少しでもよりそいたくて、メンバーの方とたくさんお話ししたくて

目をつぶって点字ブロックを使い歩いてみたことがあります。目をつぶると真つ暗でとても怖いし、足の感覚で点字ブロックを認識するのが難しく、少し進んだところで立ち止まってしまいました。でも、横に付きそいの人が居てくれたり盲導犬が居たら少しは安心して外を歩くことができるし、階段の上り下りも可能になり行動範囲が広がります。盲導犬を連れていない方やボランテアの方と一緒に居ない方は白杖を使って行動していました。田舎ではあまり見かけませんが、都会などでは目の見えない方と出会います。点字ブロックを使用している人、そうでない人、様々です。盲導犬を連れている方はほとんど出会った事がなかったので、少しめずらしいのかもしれない。

今、私に出来ることは何か考えてみました。今まで困っている方は見たことがあります、立ち止まって困っている方がいたら、勇気を出して「何かお手伝いできることはありませんか？」と、優しく声をかけてみたいです。障がいのある方をバカにする人がいますがそのような事がなくなり、優しい世

の中になればいいなと思います。

## つながる努力

一般 齋藤 智栄

今夏も記録的な猛暑が続いた。テレビからは連日「我慢せず冷房を適切に使ってください」との注意が流れる。これはエアコンの冷気が体に悪いとか、経済的な理由からエアコンを使えないなどといった、意図的に使用を控えている人たちへの呼びかけというふうに受け取れる。だが、現実には自分でリモコンの操作が出来ず、使いたくてもエアコンを使えないといった人も多いのではないか。そんな想像を巡らせるのも、とにかく暑かったせいだ。エアコンを我慢できるレベルではなかった。

大正十四年生まれ之母は、八十八歳の時、腰椎を圧迫骨折して以来、ずっと車いすで生活している。そんな母でも、約八年間いろいろな支援を得ながら、

自宅で一人暮らしを続けることができた。それというのも母が新しい物好きで、便利な家電製品を積極的に使っているタイプだったからである。

自宅一階の床をバリアフリーにし、とりあえず車いすで暮らし始めた母は、週末に帰省する私を待ちかねて、いろいろな要望を出した。中でも家電製品に関する要望が多かった。扇風機のコードを車いすの邪魔にならない位置に固定したり、電子レンジの操作にまごつかないようにと、温め専用ボタンに大きく印を付けるなど、私はその都度、できる範囲で母の要望に応えていった。

車いすの使用にあたり一番危険なのは、座った状態で前屈姿勢をとる事だ。ブレーキをかけ忘れて座面から滑り落ちてしまうと、自力では元に戻れない。これを恐れた母は、エアコンはもちろん、扇風機、テレビ、室内照明など殆ど全てをリモコンで操作していた。

ところが、次第に母はエアコンのリモコン操作に苦勞するようになった。白内障の進行とともに風量、風向などの細かな表示が見えづらくなったからだ。

このため常時「自動」に設定しておくのだが、それでも電池容量が減ると表示が薄くなってしまう。だから、すぐに電池を交換できるように、母の机の引き出しに多種多様の乾電池を常備した。

やがて視力だけではなく、指先の微細な運動機能が衰え始めると、リモコンの小さなボタンを押せなくなつた。また、就寝時には補聴器を外しているのでリモコンの「ピッ」という反応音を聞きとれず、誤操作が増えた。気丈な母は、そんな困り感をいちいち口にしなかったが、次第に電池交換など私への頼み事が増えていった。電池収納部分の開閉や、電極の向き設定が困難になつたと思われる。

私の自宅は明石にあり、また当時は勤めがあつたので、毎土曜しか母の世話をできなかつた。一人暮らしの母を案じた地域の民生委員さんは、早速市の社会福祉課に連絡し「緊急通報機」（安心見守りコール）の利用を提案してくれた。私が同居してからは、この装置が不要になり、安心見守りコールを返却した。このように本市の福祉サービス、支援制度は充実しており、母はしっかりと支援のネットの中

に入ることができた。母が当地に嫁いであら六十余年、近隣の人たちとの繋がりを大事にしてきた結果だと、私は自分なりの解釈をしている。

一方、猛暑の中で本当に困っている人たちは、支援を求めようにも相談の窓口へ出向くことや、電話をかけることさえ厳しいのではないか。だからといって公的機関や地域団体がそのような要支援者を漏れなく見つけ出す事は大変難しい。支援体制が整っているのにアクセスする手立てのない現実があるとすれば残念でならない。

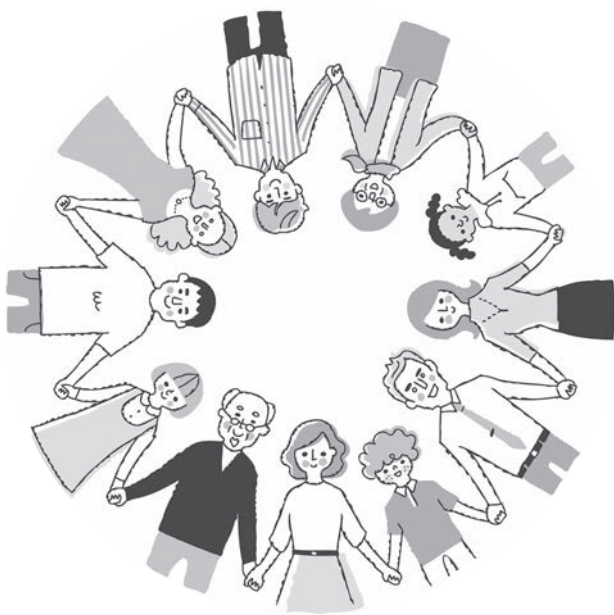
人は年を重ねるにつれできない事が増える。程度の差こそあれ、大半は障がい者になると覚悟したい。テレビ等で放映されている百歳超えの元気な高齢者はあくまでも理想像であって、自分がそうなれるとは思えない。この現実を踏まえ、早期に自身で備えをしておく必要性を痛感する。それは老後の資金準備のみをさすものではない。頼りになるのは家族に限らず、身近な人の温かい目であり、手である。それを母の世話を通して痛感した。

先日私と同年代の人が語っている YouTube を視

聴した。

「最初はしぶしぶ自治会の世話役を引き受けたけど、おかげで地域の福祉サービスや、いろいろな関係窓口を知ることができて良かった。不確かなインターネットの情報とは断然違う。やっぱり自分のできる世話をしてこそ、気づくことが多い」

聞いて、自分も積極的に助け合いのネットワークに繋がっていく努力をしようと思いはじめた。



## みんなが暮らしやすい工夫

赤穂高等学校二年 清水菜月

現代の日本は少子高齢化社会であるため、私は高齢者や障がい者が住みやすいサービスがどこで、どんな風に使われているのだろうと思ひ、調べてみることにしました。

調べてみると、日本各地でたくさん取り組みがありました。

一つ目は、高齢者向けの取り組みです。

高齢者同士の交流をつくったり、簡単にできる体操や楽しく続けられる運動のやり方を教えたりする取り組みがありました。

二つ目は、ユニバーサルデザインです。

ユニバーサルデザインとは、誰もが利用しやすい、暮らしやすい社会にするためのデザインのこと

です。

ユニバーサルデザインは、私たちの身近にある自動ドアやシャンプー容器の突起、広い自動改札に利用されています。また、子どもや車いすの方でも中身が見やすく、取り出しやすいドラム式洗濯機にもユニバーサルデザインが利用されていました。

私たちがよく使ったりするものだけでなく、こんな所にも使われていたんだと驚いたものもあつてすごいと思いました。

三つ目は、バリアフリーです。

バリアフリーとは、障壁となるものを取り除き、生活しやすくすることです。

具体例として、点字ブロックや音声付きの信号機、スロープなどがあります。

私が学校へ行く道にも点字ブロックなどのバリアフリーを見るようにたくさん場所にバリアフリーがあるんだと実感しました。

私は小学生の時にアイマスク体験と車いす体験をしました。

アイマスク体験はアイマスクをつけた瞬間、目の



前が真っ暗になりました。正直私は怖かったけれど、ペアの人が声をかけてくれて無事に終わらせる事ができました。

車いす体験は少し怖かったけれど、スロープのおかげで、車いすが動かしやすく改めてバリアフリーはすごいと実感しました。

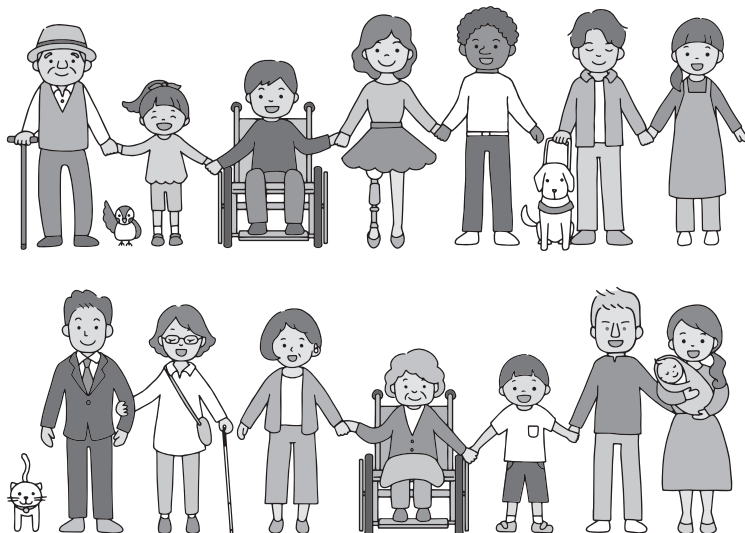
こんな風にアイマスク体験や車いす体験を通して、目が不自由な人や足が不自由な人の気持ちを理解することはとても大切だと思います。

このように、高齢者や障がい者が暮らしやすくする取り組みやユニバーサルデザイン、バリアフリーなどのたくさんの工夫がありました。

特に、ユニバーサルデザインは私の身近にあるため、ユニバーサルデザインに気づかずに使っているものがあるかもしれないから、ユニバーサルデザインのアイデアを考えてくれた方やつくってくれた方などに感謝して利用したいです。

高齢者や障がい者への取り組みやユニバーサルデザイン、バリアフリーなどのおかげで暮らしやすい人がたくさんいると思います。

だからといって、取り組みやユニバーサルデザイン、バリアフリーだけでなく、人間も困っている人がいたら助けることはすごく大事だと思います。お互いに助け合って笑顔がもっと増えてみんなが暮らしやすい社会になってほしいと思いました。





この冊子は、共同募金の配分金で  
製本いたしました。

ご意見、ご感想等ございましたら下記までご連絡下さい。

〒678-0232 赤穂市中広267

赤穂市社会福祉協議会(総合福祉会館内)

TEL(0791)42-1397/FAX(0791)45-2444

E-mail ako-shakyo@ako-shakyo.jp

---

## 福 祉 作 文

令和5年12月発行

編集・発行：社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

---

